

まえがき

たまにはテレビを見ようと思い付き、テレビを点けてみる。たまたま見たチャンネルでは、世代間の年金の不公平という話題で、コメンテーターが意気揚々と話をしていた。世代間の不公平であるのだろうか？ そんな疑問がわいてくる。

広い世界全体見回せば、不公平なことはいっぱいある。ただ、日本に限ってみれば、不公平だと文句をいうようなことは、実はそんなにはないような気が、個人的にはしている。

今日のテレビによれば、70歳以上のシニア層は、年金受給額が特に恵まれているというコメントであった。確かに払った（積み立てた）金額の割に支給額は大きい。これは認めるとしても、この年代は、戦争に巻き込まれて大変な目に遭ってきた。戦後の食糧難の時代を成長期に経験してきた。一方、現在20代、30代の若者は、世の中にモノがあふれてきた時代に生を受け、一般的には、物質的不自由なしに育ってきた。

お金の額だけではなく、人生のトータルという意味で、生涯通して平均化すると、それほどの世代間の不公平はないような気がしている。

さて、戦後70年。日本人は、ひたすらそれまでの不自由・不便からの脱出を図ることに涙ぐましい注力を注いできたといえる。そして、個人の自由、生活の便利さを、一応は手に入れたのであった。

最近の世相を、大局的に別の観点からみると、戦後70年で、不自由さから自由の獲得・個の確立を行い、不便から脱して、便利を得てきたが、その2つは、ブレーキが利かなくなり、行き過ぎて、勝手気ままな社会、安易な生活を許してしまっているようにも見える。すなわち、別の表現をすれば、団体から個へ、個から孤へと変遷して、不便から便利へ、便利から安易へと変遷してきているように思える。

最近の世相で、気になることが多々ある。電車に乗ると、ほとんどの若者は、スマホを見ているだけ。他の人との会話、接触などほとんどない状況である。私は、よく乗る京阪電車で、京都から大阪までの1時間近く、そうした若者をすこし意地悪く観察し続

ける。ほとんどの若者は、メールの確認、個室状態（イヤホンを着けて、ひたすら音楽を聴いているか、寝ている）で音楽を楽しんでいる、指をせわしく動かして、ゲームを楽しんでいる者もいる。現代世相の代表的キーワードとして、“孤”と“安易”の2つを挙げたい。

私は、前述のスマホの利用を“三方悪し”と考えている。スマホは、非常に便利で、災害時の情報手段など、役立つこともあるということとは認めているが、あえてそのように言わせていただきたい。

1つ目は、他人との接触がなく言語コミュニケーションに悪い。2つ目は、小さな文字、画面を見続けて目に悪い。3つ目は、ひたすらうつむいた姿勢を取ることににより姿勢に悪い。3つ目の姿勢に悪いは、うつむいている姿勢と、いつも片方にスマホを持ち、斜めに傾いた姿勢をとり続け、最悪の姿勢をとっていることになる。

もっとも、数々の古典にも見えるように、いつの時代も、そのときどきのシニア層からは、「最近の若者は……」という嘆きがあるものである。現代の若者を見ていると、以

前の若者になかった考え方の自由さ、行動力があり、その点では、私個人としては、大いに評価している。

そうした点は、百も承知であるが、今あえて、勇気を出して、訴えねばと考えている。しかも、私と同年代のシニアを通じて、若者に対し、あたたかい眼差しで、そういう助言を与えられないものかと、考え続けている。若者を批判するのではなく、健全な方向に導ける、助言のようなものができないかと願っている。

2017年の年末になり、今年の数々の出来事、事件を振り返ってみる。いじめから発したいじめられた者の自殺、父母の乳児への折檻から発した子ども殺人、SNSで自殺願望の人を集めての殺人など痛ましい事件が、数々起こった。こうした事件を見聞きして、今、日本人に一番必要なものは何かと問うてみた。

求めているのは、他人に干渉されない自由？ 究極の便利な生活？ いや、そうではな
いはずである。楽しくできる活動場所、くつろげる生活場所の確保、家族や地域の繋が
り、そして、その中で生き生きと活動し、各々の人間の存在が尊重され、自分とその周

りの人々との温かい交流がある社会。今こそ、そういったものを獲得したいものである。今回の出版物で、世に問いたいことは、最近の若者がだらしのないなどの指摘ではなく、お互いの世代間で、自分たちの世代の欠点も自覚し、直していかなければならないという意識の元、世代間の親密な交流を図ることが重要であると考えている。こうした交流によって、先に挙げた社会問題の多くが、事前に発生しない、または、発生しても、小さなトラブルで収まるはずである。

技の世代継承という言葉がある。一般的には、中小企業の高度な匠の技術伝承のようなことを指していることが多い。だが、ここでは、世代間のコミュニケーションに焦点を当てて、世代間を繋ぐ話し方、コミュニケーションの知恵について考えてみたい。この出版物が、そういった世の中を作り上げることに、少しでも役立つことができればという思いで、本書を刊行するに至ったのである。

2018年秋